

# 高校運動部活動において指導者行動が生徒に与える影響

勝 健 真

本研究の目的は、高校運動部活動において、指導者の行動が生徒にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることである。対象者は高校運動部活動に所属している生徒1055名で、彼らが捉えた指導者の行動を明らかにし、また、その指導者行動と部活動に対する生徒の態度との関連を検討した。クラスター分析を用いて、指導者行動の様々な側面を考慮に入れて、4つの指導者行動に分類をし、各指導者行動における生徒の部活動に対する態度を明らかにした。結果として、生徒が認知した4つの指導者行動は、権威的な指導者、放任的な指導者、専門的で献身的な指導者、専門的で支配的な指導者であった。そして、4つの指導者行動において、指導者に対する態度と競技に対する態度に違いが見られた。専門的で献身的な指導者と捉えた生徒は、指導者に対する態度や競技に対する態度が肯定的であるということが明らかになった。結論として、競技に対する専門性や、指導者の期待・関心を生徒がどのように認知するかによって、指導者に対する態度や、競技に対する態度が異なるということがいえる。

## 【緒言】

今日の高校運動部活動における指導現場では、生徒に対して、指導者の様々な関わり方が見受けられる。例えば、生徒と心理的な距離が近く、コミュニケーションを密にとっている指導者もいれば、威圧的で一方的に自分の考えを生徒に押し付けている指導者などが存在している。そして、このような指導者の関わりによって、生徒の部活動に対する態度が望ましいものとなるかどうか異なってくると考えられる。

これまでに指導者の関わりが生徒に及ぼす影響に関する研究は数多く行われており、AmoroseとHorn(2000)、ChelladuraiとSaleh(1980)、森ら(1990)は、指導者行動やリーダーシップ行動、社会的勢力に対する生徒の認知が、生徒のスポーツ活動に対する態度にポジティブな影響やネガティブな影響を与えると指摘している。AmoroseとHorn(2000)は、懲戒的な行動は、生徒の競技に対する動機づけを低下させると報告している。しかしながら、すべての生徒が懲戒的な行動によって、動機づけを低下させるとは限らない。実際のスポーツ現場では、同じ指導者の関わりであっても、生徒の反応は様ではなく、様々な反応が見受けられる。つまり、懲戒的な行動でも、ある生徒にとっては、動機づけを高めることもあれば、動機づけを低下させることも考えられる。例えば、普段から積極的に生徒とコミュニケーションをとっている指導者や、競技に対する専門性が高い指導者からの懲戒的な行動であれば、その行動は、生徒の動機づけの低下につながるとは限らないだろう。したがって、指導者行動やリーダーシップ行動が生徒に及ぼす影響の背景には、指導者の競技に対する専門性や生徒に対する関心など、様々な要因が絡み合って生徒に影響を及ぼしていることが考えられる。

また、これまでのスポーツ活動に対する生徒の態度を扱った研究では、伊藤と遠藤(1993)、桜井と高野(1985)、Smithら(2005)が、動機づけや満足感、適応感という側面に注目し、それらに対する指導者行動やリーダーシップ行動、社会的勢力の影響を確かめている。動機づけや満足感は、主として、競技に対して生徒がどのような態度で関わっているのかということを捉えたものである。しかしながら、スポーツ活動において、生徒が競技をする上では、指導者との関わりが存在しており、指導者の影響を多面的に理解するためには、生徒の指導者に対する関わり方がどのような様相であるのかを考えることが必要である。なぜなら、生徒が、指導者に対して、閉鎖的で指導者の考えを受け入れていない状況で部活動に取り組んでいる場合、そのような生徒の競技に対する態度は、望ましいものとならないことが考えられる。つまり、生徒が指導者の考えや指導方針などを自分の中でどのように取り入れ、生徒

自身がその考えや指導方針をいかに競技に活かすことができるかが、生徒の部活動に対する望ましい態度を実現する上で重要であると考えられる。

以上のことから、本研究の視点は、次の2点である。1点目は、指導者の行動の様々な側面を考慮に入れて、指導者行動を包括的に捉えることである。2点目は、スポーツ活動に対する生徒の態度として、競技に対する態度に加えて、指導者に対する生徒の態度を加えることである。

## 【目的】

本研究の目的は、高校運動部活動に所属している生徒を対象とし、彼らが捉えた指導者行動を明らかにし、また、その指導者行動と部活動に対する生徒の態度との関連を検討することである。そこで以下の検討課題を設定した。検討課題1としては、指導者行動を包括的に捉え、いくつかの指導者行動を同定することである。検討課題2としては、検討課題1で同定した指導者行動から、指導者に対する生徒の態度および、競技に対する生徒の態度の特徴を明らかにすることである。

## 【方法】

### 1. 調査対象

高校生運動部員1055名(男子767名、女子288名)を調査対象者とした。なお、対象の選択にあたっては、週3日以上、指導者と生徒が部活動で関わりを持つ運動部活動に対象を限定した。

### 2. 調査内容

①フェイスシート：本質問紙は、原則的に無記名で行われた。フェイスシートでは、学年／性別／競技名／競技歴／部内の中での役割／部内での自分のポジションを記入する欄が設けてある。また、各調査対象者のプライバシー

が漏洩することは一切ないことが、ここでは改めて記載されている。

②指導者行動尺度：生徒が捉えた指導者行動を多面的に捉える尺度を作成するにあたって、指導者の信念や態度、リーダーシップをどのように捉えているのかということについて、伊藤・森らの社会的勢力を測定する質問紙と、ChelladuraiのLeadership Scale for Sport (LSS)を参考にし、4つの要因から尺度を作成した。

指導者が競技に対して十分な知識を持っており、技術指導においても精通しているといった、競技の「専門性」を反映した項目。指導者が生徒とコミュニケーションをとり、指導に意欲的であるといった、生徒に対する「期待・関心」を反映した項目。指導者の指導方針が、生徒の意見を考慮にいれず、個人的権威を強調するといった、「権威的態度」を反映した項目。指導者の指導方針が、チームの目標・練習方法・試合の作戦などに関する決定に生徒を参加させるといった、「民主的態度」を反映した項目、という4つの要因が確認された。さらに大学生に対して、これまでに会ってきた指導者についての自由記述式のアンケートを行い、その結果も考慮に入れて、生徒が捉えた指導者像を「専門性」、「期待・関心」、「権威的指導」、「民主的指導」の4つの下位尺度から尺度を作成した。回答にあたっては、各項目に対して、「そうでない(1)」から「そうである(4)」までの4件法で評定させた。

③指導者への態度尺度：本尺度は、生徒が指導者に対してどのような関わり方をしているのかを測定することから、高井(1999)が作成した対人関係性尺度を参考にした。高井の尺度は、対人関係性に関する現代の青年期心性を手がかりに作成されたものであり、発達に伴って変化していく「個」としての自己とともに変化する他者との関わり方を捉えようとしたものである。この尺度は、人に対して心を閉ざす傾向や傷つきを恐れて人前で自分の意見を言うことを避けようとする傾向を示す「閉鎖性・防衛性」、少しぐらい傷ついてもありのままの姿で人と関わっている傾向を示す「ありのままの自己」、人に自分がどう思われるかといったことを気にしたり、何かにつけてすぐに人と比較してしまう関わりを示す「他者依拠」、人のことでも自分のことによ

うに感じたり、相手の良いところも悪いところもあるままに受け入れられる関わりを表す「他者受容」、相手の言うことに耳を傾けるよりも自己主張を優先してしまったり、相手を理解しようとするよりも、自分のことをわかってほしいという気持ちの方が強い関わりを表す「自己優先」という5つの下位尺度で計26項目からなっている。本研究では、運動部活動における指導者に対して生徒の具体的な関わり方を測るために、この高井の尺度を対指導者用に項目を修正して尺度を作成した。回答に当たっては、各項目に対して、「全くあてはまらない（1）」から「かなり当てはまる（4）」までの4件法で評定させた。

④競技への態度尺度：本尺度は、競技において生徒がどのような関わり方をしているのかということ測定することから、桜井・高野（1985）の動機づけの方向性を測定する尺度を参考にし、一部加筆修正して質問項目を作成した。桜井らの尺度は、家庭での学習場面を含め、できるだけ多くの知的学習場面から項目が作成されており、興味や好奇心により様々な問題に取り組む傾向を示す「知的的好奇心」、遂行した問題のできばえを自分で判断できる傾向を示す「達成」、困難な問題に挑戦する傾向を示す「挑戦」、ある行動をする意図が個人によって引き起こされているのか、環境によって引き起こされているのかを示す「認知された因果律の所在」、ある行動をするときに、その行動をすること自体に目的があるのか、その行動をすること以外に目的があるのかを示す「帰属」、学習が楽しいかどうかを示す「楽しさ」の6下位尺度から構成されている。本研究では、高校運動部活動に所属している生徒を対象にしているため、この桜井・高野（1985）の尺度を運動部活動場面に反映するように項目を修正し、尺度を作成した。

## 【結果及び考察】

### 1. 指導者行動の同定

まず指導者行動尺度30項目に対して、因子分析（バリマックス回転）を行っ

た。因子の抽出にあたっては、固有値が1以上の因子を採用し4因子解を選択した。4因子全体に対する寄与率は55.7%であった。第1因子は、競技に対して高い専門性を持っているという項目から構成されていることから、「専門性」と命名した。第2因子は、指導者が生徒とコミュニケーションをとり、生徒のことをよく考えているという項目から構成されていることから、「期待・関心」と命名した。第3因子は、生徒の意見や考えを考慮に入れないという項目から構成されていることから、「権威的態度」と命名した。第4因子は、生徒の意見や考えを考慮に入れるという項目から構成されていることから、「民主的態度」と命名した。

因子分析から得られた指導者行動尺度の4つの下位尺度得点を標準得点化し、クラスター分析(K-means)を行った。本研究のクラスター分析の目的は、指導者行動を包括的に捉えて、いくつかの指導者行動を同定することである。クラスター分析による指導者行動の決定にあたり、4を指定した場合に最も解釈可能な結果が得られ、本研究では、4つのクラスターを抽出した結果を採用した。4つの指導者行動の概要を図1に示す。各指導者行動の特徴を以下に記述する。

クラスター1 (n=136)：このグループの生徒は、指導者の専門性や期待・関心が低く、生徒の意見や考えを考慮に入れない指導スタイルをとる指導者と認知している。したがって、このグループの生徒は、指導者のことを「権威的な指導者（以下、権威型と記す）」と捉えていることが考えられる。

クラスター2 (n=236)：このグループの生徒は、指導者の専門性や期待・関心は低いが、生徒の意見や考えを考慮に入れた指導スタイルをとる指導者と認知している。指導者の期待・関心が低いということは、生徒とあまりコミュニケーションが取れておらず、指導者は部活動に積極的に関わっていないと生徒が認知していることであり、これを考慮に入れると、指導者はあまり部活動に関わらないが、生徒が自由に練習できる環境を作っているということが想像できる。したがって、このグループの生徒は、指導者のことを「放任的な指導者（以下、放任型と記す）」と捉えていることが考えられる。

クラスター3 (n=384)：このグループの生徒は、指導者の専門性や期待・関心が高く、生徒の意見や考えを考慮に入れた指導スタイルをとる指導者と認知している。したがって、このグループの生徒は、指導者のことを「専門的で献身的な指導者（以下、専門献身型と記す）」と捉えていることが考えられる。

クラスター4 (n=272)：このグループの生徒は、指導者の専門性や期待・関心は高いが、生徒の意見や考えを考慮に入れない指導スタイルをとる指導者と認知している。したがって、このグループの生徒は、指導者のことを「専門的で支配的な指導者（以下、専門支配型と記す）」と捉えていることが考えられる。

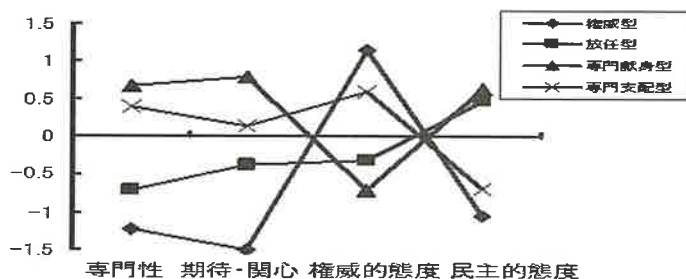


図1 指導者行動の因子得点プロフィール

## 2. 指導者行動ごとの部活動に対する生徒の態度の特徴

各指導者行動に見られる部活動に対する生徒の態度の特徴を比較検討するために、指導者への態度尺度の4つの下位尺度と、競技への態度尺度の5つの下位尺度を従属変数とした一要因分散分析を行った。また、多重比較検定に際しては、各グループの度数が異なっていることから、Tukey-Kramer法を採用し、有意水準を1%に設定した。図2には各指導者行動にみられる指導者に対する態度の特徴を、図3には競技に対する態度の特徴を示す。

### 2-1. 指導者行動ごとの指導者に対する態度の特徴

まず権威型について、分散分析を行った結果、有意差が認められた (F(3,

651)=91.43,  $p<.01$ )。そこで、多重比較を行ったところ、閉鎖性と自己優先には有意な差が認められなかったが、その他のすべての因子間で有意な差が認められた。このグループは、受容的な関わりが顕著に低く、その他の因子においても、他者評価の因子は平均よりも低く、閉鎖性と自己優先の因子は平均よりも高い得点を示した。したがって、このグループの生徒は指導者に対する関わり方として、受容的な関わりをせず、閉鎖的になり、指導者のことを意識せず、自分の考えを優先するという特徴があるといえる。この結果から、指導者の指導が自身の競技力向上や実力発揮に結びつかず、指導者が部活動に対しても積極的でなく、生徒の悩みなどにも関心を示さないにもかかわらず、生徒の考えや意見を取り入れないで指導者が独断で練習内容などを決めると感じている。そのため、生徒の中では、自分の考えで練習を行いたいのにできないという状況が生まれ、指導者に対する不満がかなり高いことが考えられる。したがって、このグループの生徒は、受容的な関わりが顕著に低いことから、指導者の考えを受け入れることができない。その結果、指導者と距離をとり、指導者のことを信頼しておらず、指導者に対して否定的な関わり方をしていると捉えられる。Chelladuraiら（1980）は、専制的指導行動が生徒に高く認知されると、指導者に対する満足感が低下すると報告していることから、権威的な指導スタイルは、指導者に対して、生徒の否定的な感情が生まれやすいことが示唆される。さらに、指導者の専門性や期待・関心が低いことで、その傾向は高くなると考えられる。

次に放任型について、分散分析を行った結果、有意差が認められた ( $F(3, 943)=18.58, p<.01$ )。そこで、多重比較を行ったところ、自己優先が、受容的な関わり、閉鎖性、他者評価の間で有意な差が認められた。その他の因子間では有意な差が認められなかった。このグループは、自己優先が平均よりも高く、受容的な関わり、ならびに他者評価は平均よりも低かった。また閉鎖性においては際立った特徴がみられなかった。したがって、このグループの生徒は指導者との関わり方として、受容的な関わりをしておらず、指導者のことを意識せず、自分の考えを優先するという特徴があるといえる。この結果か



ら、生徒は指導者の指導が競技力向上や実力発揮に結びつかず、指導者が部活動に対して積極的に関わっていないが、自分たち生徒の意見や考えを取り入れてくれると感じている。少し飛躍して捉えると、このグループの指導者は、専門性が低く、自分があまり部活動に積極的に関わっていない分、比較的生徒が自由に練習できる環境を作り出していることが想像できる。したがって、このグループの生徒は、指導者に対して、自分たちの考えを聞いてくれるということで、閉鎖性は低く、否定的な感情を抱いていないが、専門性や期待・関心が低いために、指導者に対する信頼感は低いと考えられる。このようなことから、生徒は、部活動において指導者との関わりは浅く、表面的な関わりしかしていないと捉えられる。

続いて専門献身型について、分散分析を行った結果、有意差が認められた( $F(3, 1535)=115.71, p<.01$ )。そこで、多重比較を行ったところ、閉鎖性と自己優先の間に有意な差が認められなかったが、その他のすべての因子間で有意な差が認められた。このグループは、権威型と全くの逆の結果となり、受容的関わりが顕著に高く、閉鎖性と自己優先の因子は平均よりも低く、他者評価の因子は平均よりも高い得点を示した。したがって、このグループの生徒は指導者に対する関わり方として、自分の考えよりも指導者の考えを優先し、受容的な関わりをしており、閉鎖的でなく、指導者のことを意識しているという特徴があるといえる。この結果から、生徒は、指導者の指導が競技力向上や実力発揮に結びつき、指導者が部活動に対しても積極的で、自分たちの悩みの相談にも乗ってくれ、さらに練習内容なども自分たちの意見や考えを快く聞いてくれて、その考えを反映させた部活動運営を行ってくれると感じている。したがって、このグループの生徒は、指導者の指導力が高く、指導者と様々な側面でコミュニケーションがとれていることから、指導者の考えや指導を全面的に信頼していると考えられる。その結果、指導者に対して肯定的な関わりをしていると捉えられる。桂ら(1993)は、部員一人一人に示す配慮的な行動が生徒に高く認知されると、指導者に対する感情にも正の影響を与えると指摘しており、指導者が、生徒の悩みの相談に乗ったり、

コミュニケーションを活発にとったりすることが、非常に重要なことであるといえる。また、伊藤（1994）の研究においても、指導者の専門性や指導意欲が生徒に高く認知されることによって、指導者に対する満足感が高くなることを示唆しており、指導者の専門性や期待・関心が生徒に高く認知されることは、指導者に対する生徒の関わり方も肯定的なものになると考えられる。

最後に、専門支配型について、分散分析を行った結果、有意差が認められた ( $F(3, 1087)=10.81, p<.01$ )。そこで、多重比較を行ったところ、受容的関わりと閉鎖性、閉鎖性と自己優先、他者評価と自己優先の間で有意な差が認められた。このグループは、閉鎖性と他者評価の因子が高く、受容的関わりと自己優先において際立った特徴がみられなかった。つまりこのグループの生徒は、指導者に対する意識が高いが、閉鎖的になるという特徴があるといえる。この結果から、生徒は、指導者の指導が競技力向上や実力発揮につながり、部活動に対しても積極的に関わっているが、指導者は話しかけにくい雰囲気を出しており、練習内容などにおいても、自分たちの意見や考えを聞かずに独断で決めていると感じている。伊藤ら（1992）は、指導者の専制的指導行動を高く認知している生徒は、罰勢力も高いと指摘している。罰勢力は、「指導者が怖い」や「指導者に反抗する勇気がない」という項目から構成されていることから、このグループの生徒は、指導者に対して、逆らえない立場に置かれている可能性がある。これは、指導者に対する生徒の態度からも窺える。このグループの生徒は指導者に意識が向いているにもかかわらず、指導者に対して心を開いていないという特徴がある。またわずかではあるが、受容的関わりも高いことから、指導者を受け入れようとしているが、それより心を閉ざす傾向がかなり強いために、指導者との関係にジレンマを感じている状況が想像できる。つまり、指導者に近づきたいけど、近づけないという葛藤を抱えていると考えられる。したがって、生徒が競技面で疑問などがあつたとき、指導者に聞きに行きたいけど、行くのが恐くて行けないというような状況を生み出すことが推測できる。伊藤（1994）の研究では、指導者の専門性や指導意欲が生徒に高く認知されると、指導者に対する満足

感が高くなると示唆していた。しかしながら、指導スタイルが権威的であると生徒が捉えることによって、指導者に対して心を閉ざす傾向にあることが示された。したがって、指導者の専門性や期待・関心が高くても、指導スタイルが権威的であると生徒が捉えることによって、生徒の指導者に対する関わり方は否定的なものになるということが推測される。

以上のことから、指導者の指導行為によって、指導者に対する生徒の態度が異なっていることが明らかとなった。また、この4つのグループの中で、指導者に対する生徒の態度が最も肯定的だったのは、専門献身型であった。逆に、権威型、放任型、専門支配型は、指導者との関係になんらかの否定的な問題を抱えていることが考えられる。

## 2-2. 指導者行動ごとの競技に対する生徒の態度の特徴

権威型について、分散分析を行った結果、有意差が認められた ( $F(4, 814)=18.33, p<.01$ )。そこで、多重比較を行ったところ、楽しさが、専心性、無気力、困難への挑戦、内的帰属の間で有意な差が認められた。このグループは、楽しさが平均よりも顕著に低い得点を示しており、さらに無気力は平均よりも高い得点を示している。したがって、このグループの生徒の競技に対する関わり方として、楽しさを感じておらず、向上心や意欲を持って競技に取り組んでいないという特徴があるといえる。この結果から、生徒は、自分のやりたい練習ができず、部活動に対して苛立ちが高まることが考えられる。さらに、部活動に対する充実感は低く、無気力感をあらわに出していることが考えられる。宮内（1990）は、生徒は、指導者が独断で練習内容などを決めることを望んでいないということを示唆しており、指導者が権威的なスタイルであると認知されることによって、生徒の競技に対する関わり方は、否定的になると考えられる。また、指導者の専門性や期待・関心の低さが、競技に対する否定的な関わり方に拍車をかけていることが推測される。

放任型について、分散分析を行った結果、有意な差は認められなかった。統計的に有意差は出なかったが、無気力の得点が若干高い得点を示している

## 高校運動部活動において指導者行動が生徒に与える影響（勝）

ことから、このグループの生徒の競技に対する関わり方として、向上心や意欲が低い傾向にあるといえる。この結果から、生徒主体で自由に練習ができるが、指導者が部活動にほとんど関与していないために、生徒の中に甘えが生まれることが考えられる。このようなことから、競技に対して、目的意識を持たずに日々の練習に取り組んでいることが考えられる。

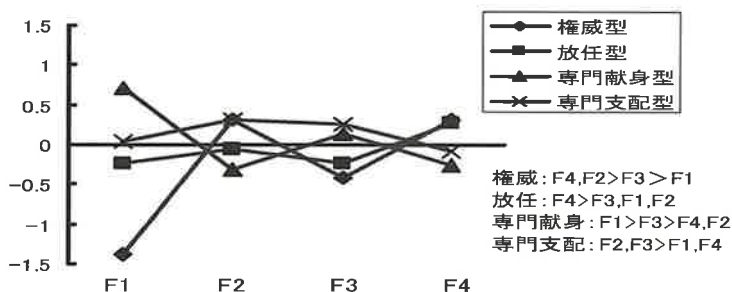
専門献身型について、分散分析を行った結果、有意な差が認められた ( $F(4, 1919)=26.53, p<.01$ )。そこで、多重比較を行ったところ、楽しさが、専心性、無気力、困難への挑戦、内的帰属の間で有意な差が認められた。さらに無気力は、専心性と内的帰属の因子の間で有意な差が認められた。このグループは、楽しさが平均よりも顕著に高い得点を示しており、さらに専心性や内的帰属においても平均よりも高い得点を示し、無気力は平均よりも低い得点を示している。したがって、このグループの生徒の競技に対する関わり方として、楽しさを感じており、向上心を持って意欲的に取り組み、競技すること自体に楽しさや喜びを感じている特徴があるといえる。宮内（1990）は、生徒が指導者に対して、練習や試合における技術や戦術指導に高い期待を抱き、練習時間や内容などの意志決定に部員が参加することや、指導者が部の人間関係などの問題に関わること、生徒の努力や過程に対して評価することを望んでいると報告している。このグループの生徒が捉えた指導者行動は、そのすべてにあてはまっており、生徒が望む理想的な指導者行動であるといえる。したがって、当然そのような指導者のもとでは、競技に対する関わり方も肯定的なものになると考えられる。

専門支配型について、分散分析を行った結果、有意な差が認められた ( $F(4, 1359)=4.43, p<.01$ )。そこで、多重比較を行ったところ、楽しさと無気力の間で有意な差が認められた。このグループは、楽しさと専心性と内的帰属が平均よりも低い得点を示している。したがって、このグループの生徒の競技に対する関わり方としては、競技に対して楽しさを感じておらず、無気力感が高く、さらに、練習をする目的は競技すること自体が楽しいからではなく、試合で勝つためという外的な方向に意識が向いていることを特徴とし

高校運動部活動において指導者行動が生徒に与える影響（勝）

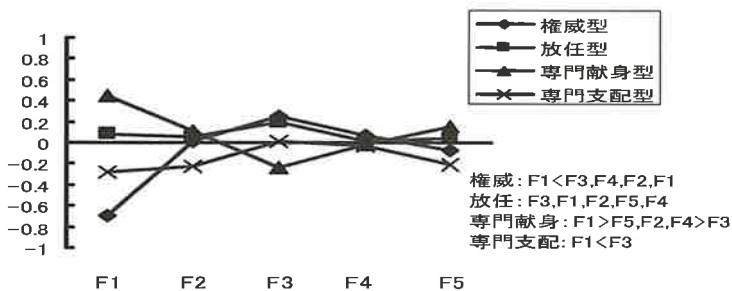
ている。

この結果から、指導者の専門性や期待・関心の高さが、生徒にとって、競技に対する取り組みに肯定的な影響を与えているとは言い難い。逆に、指導者の期待・関心が高いことが、生徒にとって、プレッシャーとなり、生徒を苦しめていることが考えられる。このグループの生徒は、指導者に逆らえない立場にいることから、練習においても、まずは指導者に言われたことをやるという思考に陥り、その思考が向上心や意欲を低下させ、試合で勝つことという結果だけを追い求める方向に意識が向いてしまうのではないかと推測できる。したがって、いくら指導者の専門性や期待・関心が生徒に高く認知されていても、指導スタイルが権威的であると認知されることによって、生



注) F1:受容的関わり F2閉鎖性 F3:他者依拠 F4:自己優先

図2 各指導者行動における指導者に対する生徒の態度の特徴



注) F1:楽しさ F2専心性 F3:無気力 F4:挑戦 F5:内的帰属

図3 各指導者行動における競技に対する生徒の態度の特徴

徒の競技に対する関わり方は、結果的に否定的なものになるということが示唆される。

### 【全体的考察】

これらの結果から、指導者が生徒の意見や考えを考慮に入れた民主的な指導スタイルをとると生徒に認知されていても、競技に対する専門性や、生徒に対する期待・関心が低いと認知されることによって、指導者の考えを受け入れず、自分の考えを優先させ、さらに、競技に対しても無気力傾向にあるということが示唆された。また、指導者が生徒の意見や考えを考慮に入れない権威的な指導スタイルをとると認知された場合、競技に対する専門性や生徒に対する期待・関心の高さによって、指導者に対する態度に関する問題や競技に対する態度に違いが見られた。Chelladuraiら（1980）によると、民主的な指導スタイルをとる指導者は、指導者に対する満足感や競技に対する動機づけを高め、権威的な指導スタイルをとる指導者は、指導者に対する生徒の満足感や動機づけを低下させると報告している。しかしながら、本研究では、指導者の態度を多面的に捉えることによって、必ずしも民主的な指導スタイルが、生徒の指導者に対する満足感や動機づけを高めることにつながらないということが明らかとなった。また、権威的な指導スタイルをとる指導者でも、専門性や期待・関心の高さによって、指導者に対する態度や競技に対する態度が異なっているということが明らかとなった。したがって、指導者の態度や行動を捉える場合、様々な側面を考慮に入れて指導者を捉えていくことによって、生徒に対する理解をさらに深めていくことができると考えられる。

### 【結論及び今後の課題】

本研究では、高校運動部活動に所属している生徒を対象にし、指導者の態

度を包括的に捉え、生徒が捉えた関係パターンを明らかにし、その関係パターンと指導者に対する生徒の態度の特徴、及び競技に対する生徒の態度の特徴との関連を検討した。その結果、権威型、放任型、専門献身型、専門支配型の4つの関係パターンが同定された。そして、専門献身型のグループは、指導者に対して、閉鎖的でなく、受容的な関わりをしており、競技に対する態度も肯定的であった。しかしながら、その他のグループは、指導者に対して、閉鎖的で、受容的な関わりをしておらず、競技に対する態度も否定的であった。

本研究では、部活動に対する生徒の態度として、指導者に対する態度と競技に対する態度の2つの視点から、各関係パターンの特徴を見ることに留まっており、この2つの態度の関連までは明らかにされていない。今後の研究においては、各指導者行動で、指導者に対する態度を介在要因として扱い、各グループにおいて、指導者に対するどのような態度が競技に対する態度と関連しているのかを検討していく必要がある。

#### 【参考・引用文献】

- 1) Amorose, A. J. and Horn, T. S. (2000) Intrinsic Motivation: Relationships with collegiate athlete' gender, Scholarship status, and perceptions of their coaches' behavior. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 22: 63-84.
- 2) Chelladurai, P. & Saleh, S. D. (1980) Dimensions of Leader Behavior in Sports: Development of a Leadership Scale. *Journal of Sport Psychology*, 2: 34-45.
- 3) 伊藤豊彦・豊田一成・遠藤俊郎・森恭 (1992) スポーツリーダーシップ行動と社会的勢力の認知との関係. *スポーツ心理学研究*, 19 : 18-26.
- 4) 伊藤豊彦・遠藤俊郎 (1993) コーチの社会的勢力と選手の適応感との関係. *高根大学教育学部紀要 (教育科学)*, 27 : 37-44.
- 5) 伊藤豊彦 (1994) コーチの社会的勢力の効果に及ぼす選手の個人特性の影響. *体育学研究*, 39 : 276-286.
- 6) 森恭・伊藤豊彦・豊田一成・遠藤俊郎 (1990) コーチの社会的勢力の基盤と機能. *体育学研究*, 34 : 305-316.
- 7) 桜井茂男・高野清純 (1985) 内発的-外発的動機づけ測定尺度の開発. *筑波大学心理学研究*, 7 : 55-60.
- 8) Smith, S. L., Fry, M. D., Ethington, C. A. and Li, Y. (2005) The effect of female athletes' perceptions of the motivational climate. *Journal of Applied Sport Psychology*, 17: 170-177.
- 9) 高井範子 (1999) 対人関係性の視点による生き方態度の発達の研究. *教育心理学研究*,

## 高校運動部活動において指導者行動が生徒に与える影響（勝）

- 47：317-327.
- 10) 宮内孝知(1986) スポーツリーダーシップに関する調査報告. 早稲田大学体育研究紀要, 18：83-90.
  - 11) 桂和仁・高谷千代・竹之内隆志・大田鐵男（1993）指導者行動の認知と能力の認知が対人関係ならびにスポーツ活動からの離脱に及ぼす影響. 武蔵丘短期大学起用, 1：31-40.
  - 12) 天貝由美子(1996)中・高生における心理的距離と信頼感との関連. カウンセリング研究, 29：130-134.
  - 13) 桂和仁・高谷千代・竹之内隆志・大田鐵男（1993）指導者行動の認知と能力の認知が対人関係ならびにスポーツ活動からの離脱に及ぼす影響. 武蔵丘短期大学起用, 1：31-40.
  - 14) 杉原一昭・桜井茂男（1987）児童の内発的動機づけに及ぼす教師の性格特性およびリーダーシップの影響. 筑波大学心理学研究, 9：95-100.
  - 15) 田口守隆（1995）スポーツ活動の教育的機能. 体育科教育, 5：10-13.
  - 16) 上野耕平・中込四郎（1998）運動部活動への参加によるライフスキルの獲得に関する研究. 体育学研究, 43：33-42